

令和7年度 第2回佐用町立学校の在り方検討委員会 意見要旨

日 時 令和7年12月23日(火)

開 会 午後3時00分

会議場 佐用町役場西館2階 防災会議室

1. 開会

2. 挨拶

3. 前回の振り返り

【委員長より説明】

4. アンケート結果報告

【企画総務係長より説明】

5. 「佐用町立学校の在り方を考える会」の報告

【企画総務係長より説明】

6. 協議事項

- ・アンケートおよび「佐用町立学校の在り方を考える会」の結果について

会と通じての意見

【委員】

アンケート内容について、小学校4校の今後の在り方、ならびに中学校の今後の在り方について、現在は「4校を1校化する」ことを支持する意見が最も多い状況にあります。これに関連して、まず今後の小学校教育・中学校教育において重要と考える事項、および教育環境として重視すべき事項があります。これらが適切に実現され、十分に満たされるのであれば、4校の統合を容認し得るという趣旨の意見であると理解しています。

当該点は資料として既に整理されていますが、さらに深く検討を重ねたいと考えます。難易度が高い課題かもしれませんが、例えば小学校教育に関する事項では、重要視されているのは「基礎的な学力の習得」であり、圧倒的多数の支持が見られます。また、より良い教育環境として重視される事項は「支援と指導体制が充実している環境」であるとの回答が最も多く示されています。

アンケートの設計に関して、前段で「何が大切か」を問うた上で、終盤に「では4校をどうするか」という設問が置かれている構成となっていました。ここで、前段で「重要である」とされた内容が、各自の期待する形で満たされるのであれば、最終的に統合を容認するという判断につながるという構造になっているのではないかと考えました。したがって、設問の順序や論理の関連性について、やや分かりにくさがあると感じています。

【委員】

アンケート結果は量が多く、現時点ではまだ十分に集約・整理がなされていません。そも

そも「学校の在り方検討委員会」とは何を考える場であるのか、改めて検討しました。学校とは教育機関であり、学校という建物があり、子どもたちが通学し、教職員、教育委員会、行政が関わります。さらに保護者が関与し、学校区という形で町全体が設定されていることから、町の住民全体が一つの教育機関の構成要素であると私は考えています。

教育機関は一つのシステムであり、明確な目的があります。その目的とは、子どもたちに教育の価値を提示することだと考えます。そして、その価値を子どもたちが健全に受け取れるように、大人が適切に支援するシステムが教育機関であると捉えています。

私はこの検討委員会に参加する以前は、保護者は先生方からサービスを受ける消費者的な立場であると捉えていました。しかし今では、保護者も教育機関というシステムの一部であり、価値を共に提示する側の一員であると考えています。本委員会は、その在り方を検討するために立ち上がったものです。したがって、教育機関の目的、すなわち「子どもたちに教育の価値を提示する」という原点から「ぶれない」ことが重要です。

最終的にシステムとしての行動や決定を行うにあたり、アンケートの多様な意見は誰かがフィルタリングし、集約せざるを得ません。その際にも、上から価値を押し付けたり与えたりするのではなく、教育の素晴らしさや価値を丁寧に提示し、子どもたちがそれを見て「教育は素晴らしい」と感じられるようにすることが重要です。その視点から施策を検討していただきたいと考えています。

統廃合については、実施の有無や規模は未定ですが、いずれの場合でも子どもの居場所の確保が必要だと感じています。私自身の子ども時代（30～40年前）は、山や田んぼ、畑で自由に遊べ、友人宅へ行くのにも親の許可を要しないことが一般的でした。勉強はそれほど好きではありませんでしたが、放課後も含めて学校は自分の居場所であったと感じています。

現在、我が子に尋ねると、放課後の自由な遊びが減少し、友達と遊ぶにも親の許可が必要で、親同士が連絡を取れない日は行けないなどの制約があります。山へ入ることも禁止され、田んぼは当然不可、公園も町に少なく、距離が遠い児童は特に居場所が失われています。このような状況で、もし学校統合により通っていた学校がなくなれば、近隣の学校という居場所までもが失われ、子どもたちの居場所の喪失がさらに進む懸念があります。

したがって、統合に伴い学校がなくなる場合でも、跡地活用として企業が入るケースがあるように、すべての機能を廃止するのではなく、子どもの居場所としての機能を何らかの形で維持することを検討すべきです。日本全国で前例のないものではなく、様々なアイデアが考えられます。子どもの居場所の確保という観点から、可能性の一つとして前向きに検討していただきたいと考えます。

【委員】

本日は校長が不在のため、教頭が出席しております。私は前回までの検討委員会に参加しておらず、急な出席となりました。貴重な機会をいただき感謝しておりますが、本日は私個

人の意見の表明は差し控えます。ご理解とご了承をお願いいたします。

【委員】

私の意見としては、いずれ合併（統合）することは避けがたいと考えています。私は岡山県出身で、人口減少の影響により、私の卒業した幼稚園・小学校・中学校はすべて廃校となりました。現在も地元を離れて生活しています。

統合に際しては、学校をどの場所に設置するかも大きな課題です。新たな校舎を建設するのか、既存の学校施設を活用するのか等、複数の選択肢があります。児童生徒の賛否や意見も踏まえ、皆様のご意見を伺いながら、私の考えを述べていきたいと思えます。

【委員】

小学校現場に携わる立場から申し上げます。統合により児童生徒数が増加することにはメリットとデメリットの双方があると認識しています。特に懸念しているのは、校区がさらに広がることです。現在でも多くの学校で校区が広く、これが拡大すれば、通学距離や通学時間が増大します。長い場合には通学時間が1時間前後になる可能性もあり、心配しています。

今年度からコミュニティスクールが始まり、地域との関わりが活発化したことは学校にとって大きなメリットです。統合後も、地域の方々が学校に関わってくださる仕組みをどのように維持・強化するかは重要な課題です。

地域住民としてですが、私は町内在住です。自分の出身保育園も小中学校も現在はありません。昔は自分の地域と学校との関わりが、本当にたくさんありました。今は教育的な部分も含め、それが難しくなっていることを感じています。そういった点も心配しております。何が最善かについては様々な意見があり、答えが難しいと思えますが、今感じていることを伝えさせていただきました。

【委員】

保護者の一人としての意見です。アンケートについて、内容が難しく、抽象的で分かりにくい項目が多いと感じました。現時点で保護者や子どもたちが何に困っているのか、児童生徒数の減少に伴い何がなくなると困るのかなど、身近な課題に寄り添った質問項目がより望ましいと考えます。

一方で、資料については「児童生徒数がここまで少なくなるのか」という事実がわかった点を評価する声もありました。資料の提示自体は有意義であったと考えます。

【委員】

「学校の在り方を考える会」の話し合いでは、年齢の高い方の意見が多く寄せられました。内容自体は誤りではありませんが、年配者は私を含め、あと何年生きることができると

思います。地域のことも全て若い人に引き継いでいかねばならない時代に、年配者ばかりが話をするのではなく、現在子どもを学校に通わせている保護者や、より若い世代の意見を多く集め、その中で方向性を決定していただきたいと考えます。若い人の意見が聞けると思い参加しましたが、実際はその逆で、非常に残念でした。年配者の意見を否定するものではありませんが、経験の共有は行いつつ、最終的には若い世代に委ねることが望ましいと考えています。

アンケートや意見の中には、仕事がない、地域がさびれるといった指摘が見られました。しかし、通える範囲で働ける場は探せば存在します。本人の希望に完全に合致する職場が少ない可能性はありますが、就労機会は一定程度あると考えます。

教育面では、子どもたちに郷土を愛し、地域を大切にすることを育む教育を望みます。地域に残り、頑張ろうとする子どもが少しでも増えるような働きかけが重要だと考えます。繰り返しになりますが、今後は若い世代の意見を十分に聞いた上で、方向性の決定をお願いしたいと思います。

【委員】

「学校の在り方を考える会」について、上月地域が初回として11月13日に開催されました。資料では上月地域の児童生徒数は33人、うち保護者4人という記載があり、委員メンバーの保護者もカウントされていると認識しています。実際の参加者は年配の方が多く、若い方の参加が少なかったのは、勤務形態（交代勤務や夜勤等）の影響もあると考えられます。

アンケート結果は示されたとおりですが、私は保護者の方々の声を直接伺いたいと考え、送迎時などにお父さん・お母さんに実際の事情を問いかけました。その結果、時代の流れとして少子化・人口減少はやむを得ないとの理解が共有されている一方で、最も重視されているのは教育環境であると確認できました。保育園・小学校・中学校と上がるにつれて、塾や習い事の話が増え、町外（他市町村）へ通うという話も保護者間で出ています。これらを踏まえると、教育環境の充実は極めて重要であるとの認識です。

また、町民の立場からすれば、財源（税収）や学校の維持管理費、先生方の雇用の問題等も考慮する必要があります。これらの制約の中で、やむを得ない判断も生じ得ると考えています。

【委員】

資料およびアンケート結果を拝見し、まずは地域の地形的・地理的条件を踏まえ、どの場所が最適かを検討すべきだと感じました。通学方法についても、現状多くの学校でスクールバスが導入されていますので、その活用を前提に、どのような運行体制が妥当かの検討が必要です。

さらに、勤務先が学校である立場から申し上げると、学校の場所が移動することにより、

地域とのつながりの維持・強化をどう図るかが課題になります。現状では、共有する地域で地域とともに活動できますが、学校の場所が移れば、児童生徒が帰宅後に地域とつながる機会にも影響が出ます。学校と地域、そして子どもたちと地域のつながりがどのように変容するのかを見据え、適切な方策を検討する必要があると考えます。

【委員】

本検討委員会での議論の方向性は、消去法的・究極の選択的な傾向が強く、「やむを得ずその選択をする」という流れに陥っているように感じています。私は、より前向きで発展的な視点から検討すべきと考えます。すなわち、統合か複式かの二択だけでなく、第三の選択肢を模索すべきです。最初から選択肢が二つに限定されている点に不満があります。

日本全体の大学進学率は現状約6割です。佐用町には大学がありません。高校卒業後、約6割の若者が町外へ進学し、その後就職等で定着してしまうため、18歳を境に人口の約6割が流出する構造があります。小・中・高校の在り方をいくら議論しても、高校卒業時点で多くが町外へ出ていく現実がある以上、根本を変えない限り、現状は変わりません。

そこで、有名私立大学の誘致を検討すべきだと考えます。大学が誘致できれば、人口問題は解決に向かう可能性があります。町外からも入学希望者が集まり、さらに保育園から小中高までの一貫教育が町立で整備されれば、移住を検討する家庭も現れます。東京よりも先進的な教育が佐用で受けられると実現できれば、「この学校で学ばせたい」という理由で移住者が増え、人口が増加に転じます。そうなれば、複式か統合かといった議論は不要になります。

また、従来の「一斉授業形式（チョーク&トーク）」に固執し過ぎないことも重要です。統合を主体とするにせよ、学びの形を柔軟に設計し、個別最適な学びや協働的な学びを取り入れるなど、新しい教育モデルを検討すべきだと考えます。

【委員】

小規模校であれ大規模校であれ、学校としてはメリット・デメリットを踏まえ、適切に対応していく必要があります。学級規模が大きくなった場合には、小グループでの学習を併用することが難しくなる側面もあると感じています。

上月小学校では、地域に教えていただく学習、地域観光学習など、地域の方が中心となり支援して下さる取組を行っています。今後、こうした取組をどのように構築・維持していくかを考えていかなければなりません。

また、児童生徒の通学に関しては、スクールバスの運営をどのように行うかなど、具体的な運行設計の検討が必要です。学校としては、検討委員会や町が決定した方針に対して、最大限の努力をもって対応していきたいと考えています。

【委員】

私は、どれほど優れたカリキュラムや環境が整っていても、最も重要なのは、我が子が「学校が楽しい」「友達や先生が大好き」と感じられることだと考えています。上月地区は人数が少ないため、保育園から小学校、中学校へと、ほぼ同じメンバーが繋がって進学していきます。これは良い面もありますが、人間関係が固定化し、しんどくなってしまい、結果として学校に通いづらくなるケースがあると聞いています。

そのため、クラス替えの実施や、アンケートにもあった「2校を選択できるようにする」といった、多様な選択肢を設け、いわば「逃げ道」を用意することも必要ではないかと考えます。

統合に際しては、通学面の不安が大きいです。現在、下の子が小学校1年生ですが、最終地点でバスを降りるため、車内で寝てしまうことがあります。これがさらに長時間になるとどうなるのか、電車を利用する場合、眠気で乗り過ごしたらどうするのか等、小学生にとって長い通学時間は負担が大きいと感じます。

一方で、子どもが学校を楽しんでいると、友達や先生を大好きだと思えることは、やがて地元を好きになり、佐用町を好きになることにつながると考えています。地域学習の日は子どもが楽しみにして登校していますので、こうした活動は今後も継続していただきたいと願っています。

【委員】

アンケートに目を通し、児童生徒、保護者、地域の方々、教職員の皆様が今回の課題を大切なものとして捉え、自分事として真摯に向き合っておられることを感じました。身の引き締まる思いです。

建物、交通手段、地域、環境などの物理的条件も重要ですが、根底では児童生徒の成長・発達が最も重要です。児童生徒が少人数で学ぶ場合と大人数で学ぶ場合とで、将来的な成長・発達到どのような影響があるのか、専門家のご意見も伺いながら、科学的知見に基づき慎重に検討すべきだと考えます。

町内で生まれ育つすべての児童生徒が、同じように健やかに成長し、生きていける環境の整備を願っています。

【委員】

保護者として参加の機会をいただき、貴重なご意見を多数拝聴できたことに感謝申し上げます。私自身、同年代の保護者の方々と、会社や日常の場で学校の件について意見交換をすることが多く、全体として関心が高いと感じています。今後、こうした関心を持つ保護者のご意見を、丁寧かつきめ細かく吸い上げていくことが重要だと考えます。

例えば、11月には各町・各学校単位での会議があったと承知していますが、その場では発言しにくい雰囲気があったのではないかと感じます。したがって、グループワークや少人

数での意見交換の機会を設けることで、より良い意見を把握できるのではないかと考えます。

また、学校のみならず、学童保育の在り方も課題として浮上すると認識しています。学童保育は放課後に子どもが過ごす重要な場であり、発達特性の強い児童がいる場合、統合により集団規模が拡大すると、安全に見守れる体制を維持できるかが課題になります。統合に伴い、学童保育の受入が困難となる児童が生じる可能性も想定されるため、学校の統合と同時に学童保育の在り方を併せて検討する必要があると考えます。

【委員】

私は本格的に農業を始めて3年ほどが経過しました。周囲を見渡すと高齢の方が多く、地域の農業者の中では自分が最も若い部類に入ります。10年後を想像すると、私自身が70代後半に差しかかり、さらに上の世代は80代となる見込みであり、10年後の姿を描きにくい現状があります。そのため、今こそ何らかの手を打つべき時期であると感じ、取り組んでいるところです。

小学校・中学校についても、10年後を見据えた検討が必要です。通学方法や学校の設置場所、運営形態など、考慮すべき事項は多岐にわたります。現状、児童生徒数は10年前の半分となり、さらに10年後にはその半分になるという縮小傾向が見られます。アンケートでも「もっと早くから討議すべきだった」という意見が多数あり、猶予は少ないと感じます。

また、先ほど、有名大学の誘致という興味深い意見が出されました。私自身、そこまで考えたことはありませんでしたが、町全体として人口減少への対応を真剣に検討する必要があると感じています。これは、私たち自身が主体的に考えなければならない課題です。

現状では大学進学者は約6割で、その方々が町外へ流出する可能性があります。私自身も一度町外へ出ましたが、郷土への愛着から戻ってきました。今いる子どもたちにも、郷土愛を育むことは非常に重要であり、自分たちが学び、育ったこの地域を守るための手段を、地方全体で考えていく必要があります。

有名大学の誘致という提案は、非常に面白い視点だと感じました。

【委員】

私は自治会を通じて、子どもたちが将来ふるさとへ戻りたいと思えるよう取り組んでいます。統合の議論が先行していますが、まず児童生徒を中心に据えるべきであり、教育課題や通学時間の問題等についても懸念しています。

【委員】

個人的な意見は現時点で確定していませんが、上津中学校は小規模校であり、その強みを最大限活用する教育を行っています。小規模校には利点と課題の双方が指摘されますが、私たちは小規模であることの強みを武器（メリット）として、上津ならではの教育を実現する

べく、教職員で相談しながら、子どもたちにとってより良い教育の提供に日々努めています。その思いをお伝えします。ありがとうございました。

【委員】

保護者としての意見です。中学校の制服が統一されるとの話があり、保護者の間では「そろそろ統合が進むのではないか」という見方が生じています。一方で、いつどのように進むのか不透明であることへの不安もあります。南光地区では、もともと3つの地域が統合して学校や保育園が一体化され、我が子も統合を経験しました。統合後、「これまでであった活動や仕組みが無くなった」との事例が複数あり、統合の印象が必ずしも良くない面もあると感じています。

友人が増えること自体は肯定的に捉えています。子どもに聞くと「友達が増えるのは良いが、できるだけ合併はしたくなかった」という声もあります。児童減少の状況を踏まえると、統合の検討は不可避である一方、中学校では部活動の選択肢を広げる観点から1校体制も選択肢として考えられます。小学校については、通学負担を考慮し、2校体制等の形を模索することが望ましいと考えます。

いずれの場合も、地域の特性を生かした学びを失ってはなりません。コミュニティスクールも始まったところですので、地域の方々との連携を大切にしながら進めるべきだと考えます。

【委員】

説明会やアンケートを拝見すると、意見は多様であり、短期間で収斂させるのは容易ではないと感じました。ただし、一貫して「魅力ある学校づくりを進めてほしい」という期待が示されています。学校の魅力とは何かを考えると、唯一無二の地域そのものに根差すことだと捉えています。地域の人・もの・ことを最大限に生かして教育を進めるべきです。

一学校長としてこれまで地域とともにある学校を目指して取り組んできましたが、これらの取組が途絶えるようなことがあってはならないと考えます。地域を愛し、地域に愛される子どもの育成は、今後も一貫して私たちが心に留め続けるべき目標です。佐用町では旧町ごとにコミュニティスクールを立ち上げ、南光地域でも進めています。これまで挙がっていない意見として、段階的に旧町ごとで小中一貫校を整備するなどの区切りを設けて進める考え方もあり得るのではないかと感じています。

【委員】

我が家は移住者で、長男は現在5年生です。1年生になるタイミングで佐用町に移住しました。少人数校の魅力を感じ、恩恵を受けています。会議を重ねることは大きな時間・労力を要しますが、統合の開始や学校閉校が一度進むと、元に戻す、新たに立ち上げるといった行為には多大なエネルギー・時間・費用が伴います。保護者の間でも統合はやむを得ないと

いう見方があり、私自身もその点に不満はありません。

ただし、こうした会議には本来多くの保護者に参加してほしいと考えます。20代・30代の現役世代は仕事が最も忙しく、家庭や地域の役割も重く、参加が難しい現実があります。そのため、私たちからも情報発信を行い、参加を促す工夫が必要です。私も担当として、その方向で力添えできればと考えています。

【委員】

様々な意見を伺いました。私としては、小学校1年生から中学校3年生までの9年間を通して、子どもたちが「この学校で学んで良かった」「先生が良かった」と感じられる学校にしてほしいと願っています。

児童生徒数の減少は避けがたい現実です。人口を増やすことは行政の役割であり、私たちは横から見守りながら、いかに充実した教育を提供できるかに注力してほしいと思います。

【委員】

多くの方からお話を伺いましたが、個々人の思いや考えは多様であり、取りまとめは容易ではないと感じました。その上で、皆さんの地元愛が非常に強いことを実感しました。母校がなくなることへのつらさ、統合に伴う通学への不安などの声を多数聞きました。

中学生の保護者からは、子どもが3年生になる年度に統合が行われる場合、4月から新たな人間関係の構築が必要となる上、受験勉強も同時に進めなければならず、子どもへの負担が大きいとの懸念が示されています。

アンケート結果については、町全体で見ると佐用地域が192件、その他が242件という数値が示されており、佐用地域の意見の比重が大きい印象を受けました。三日月地域では通学や人間関係への不安が特に大きく、人口規模の大きい佐用地域の意見が半数近くを占めることで、町全体の結果に影響している可能性があると感じました。したがって、地域ごとに均等な配布・回収を行うなど、回答数のバランスを考慮したアンケート設計が望ましいと考えます。

統合にも現状維持にもメリット・デメリットが存在します。「子どもファースト」の方針に立つのであれば、まず子どもの意見を尊重し、その次に保護者の意見を踏まえ、子どもたちにとって最良の結果につながるよう検討を進めるべきだと考えます。

【委員】

現状、勤務校の全校生徒は36人です。私が昨年度勤務していた学校の3分の1から4分の1の規模であり、児童生徒数が少なくなると、一人ひとりに目が届きやすく、個別の対応もきめ細かく行えることを強く実感しています。支援を要する子どもが多く、今後も増加が見込まれるという時代背景を考えると、これは非常に大きなメリットであると感じます。

都会と同様の在り方にこだわる必要はなく、地域の子どもは地域で育て、地域活動を重視できる小規模校教育を佐用町の魅力とすることも一つの考え方だと思います。他方で、学校現場としては決定された方針を受け入れ、子どもたちのために最善を尽くすのみだと考えています。

【委員】

三日月地域では保育園から小学校・中学校まで同じ学校で進学するため、トラブルが生じた際にクラス替えがないことが課題となる場合があります。一方で、先生と生徒の距離が近く、日々の会話や相談を通じて笑顔で帰宅する姿を見ると、小規模校の良さでも感じます。

4校を一体化する場合、三日月は谷が多い地形であり、通学手段の確保・設計が課題です。特に低学年や車酔いしやすい児童にとって、長時間のバス乗車は負担が大きいと懸念します。4校を一体化しない場合でも、少なくとも部活動のみを4校共同で実施することで、選択肢を増やしていただくとありがたいと考えます。

【委員】

私の立場として、勤務校の環境を最大限に生かした教育に取り組む役割があると認識しています。三日月小学校では、保護者や地域の方々から熱心な支援を日々いただいております。教職員も子どもたちに寄り添いながら教育を進めていることに深く感謝しています。

学校の在り方に関して共通して言えるのは、子どもと保護者にとって安心安全であり、「この学校に通えて、この地域に生まれて良かった」と思える学校を目指すことです。今後もその思いを大切にしていきたいと思います。

【委員】

三日月小学校は現時点で児童数が少なく、人間関係に逃げ場がない状況が生じるため、統合の方が望ましい面があると考えています。一方で、統合により通学距離が長くなるのが最大の不安であり、特に低学年の児童には負担が大きいと心配しています。

たつの市では2年後を目途に、新宮地域で小中一貫校の新設が予定されていると承知していますが、通学距離が長い地域の児童がどのような通学方法を採用しているのか、そこでの事例を参考にいただければと考えます。

また、統廃合がおこなわれない場合でも、子ども同士の交流機会を多く設けていただくことを希望します。

【委員】

外部的な視点からいくつかコメントします。佐用町の学校の優れた点は、小中連携・小中連携など学校間の連携が極めて進んでいることです。人数が減少しているからこそ可能に

なっている面もあり、他自治体では容易ではない取り組みであり、誇るべき点だと考えます。

この場では、学校は手段であることを踏まえ、「どのような子どもたちに育ててほしいか」という目標像を共有し、共通の考えを形成できると非常に有意義だと考えます。本委員会は答申をまとめる場として重要であり、ここで方針に合意が形成されれば、佐用町の学校の在り方は今後20年規模で大きな転換点となり得ます。そのため、ここにいるメンバーが「話し尽くした」と思えるほど議論を重ね、できるだけ多くの方が話し合いに参加し、納得感のある結論に至ることが望ましいと考えます。

私自身、他自治体で学校の在り方に関する住民説明会や意見交換会を多数経験しており、必要であれば事例紹介等の話題提供も可能です。何かお役に立てることがあれば、ぜひお申し付けください。

【副委員長】

私は長年、中学校教諭を務めてまいりました。過去に佐用地区で小学校統合が行われた際、保護者は賛成する一方で、地域の年配者から強い反対があったことを記憶しています。しかし今回の意見では、年配者の方々も「賛成はしないが、やむを得ない」という声が多く、時代の変化を感じます。

中学校については通学時間に「1時間かかる」という懸念がありましたが、役場から各地区までの所要時間を測定したところ、最も遠い地点でも36分程度でした。途中で停車をすると時間は増えます。将来的に児童生徒数が減少すれば、大型バスではなくワゴン車や乗用車で対応可能であり、台数を増やすことで全谷間に対応する覚悟が必要です。

次に部活動について、国の方針により来年9月から地域移行が進みますが、佐用町では移行が困難な状況です。理由は、学校終了後に子どもを集める手段がないためです。統合により一校に集約し、放課後に地域指導者が学校へ移動する形で地域展開を進めることが現実的と考えます。部活動は教員の負担が大きく、地域展開の推進は急務です。

小学校については複式学級の解消が課題です。複式学級は教員にとって非常に負担が大きく、同一教室で異なる学年の指導を行うことは困難です。解消には教員の加配対策や、町費での教員の雇用が必要ですが、財政負担が大きく、現実的には難しい面があります。

また、小中一貫校や中高一貫校についても地域で話題となっていますが、実際には授業時間や行事の違い、自治能力の育成など課題が多く、慎重な検討が必要です。

姫新線による通学は、下校時間の頻繁な変更に対応できないため、避けるべきです。統合を進める場合は、通学手段を最優先に考慮する必要があります。

【委員】

メリット・デメリットは資料や意見で多く挙げられていますが、これらは個人の価値観に左右される面があります。不安を意見として出すことは重要ですが、教育機関としてシステムで解消できる課題もあります。声の大きさにより不安が過度に影響することを避け、合理的な仕組みで対応する視点が必要だと考えます。

【委員長まとめ・提言】

簡単に感想を申し上げた後、答申に関する内容に入ります。

子どもたちが地域で成長することは当然ですが、将来は地域にとどまらず、世界的な視野で活躍を願う子どももいます。教育は、子どもたちの可能性や希望を実現するためのものです。限られた範囲で、似通った環境や意見の中だけで育つ場合、多様な考え方に触れる機会や刺激を得る機会が少なくなる恐れがあります。

現行の学習指導要領がアクティブラーニングを推進しているのは、複数の多様な意見を聞き、自ら主体的に取り組む中で、必ずしも正解を求めるのではなく、グループで議論し、自分の意見を述べ、その過程で自分の考えを整理し、他者の意見の妥当性や課題を理解することを通じて成長することを目的としています。

しかし、複式学級では複数の議論が成立しにくいという側面があります。もちろん、少人数の良さや人間関係の良好さというメリットはありますが、教育理念の観点からは限界が見えます。一定の規模があれば、グループ分けなどで少人数の良さを活かしつつ、多様な学びを展開できますが、極端な少人数では対応が困難です。これが、文部科学省が適正規模の基準を示している根拠だと考えます。

こうした観点から、教育の原点に立ち返って検討する必要があります。現役世代は意見を述べる機会や時間が限られているため、アンケートを実施している状況ですが、全体としてはアンケート結果を一つの基準とせざるを得ません。本日伺ったご意見を私の方で整理し、教育委員会および副委員長と協議のうえ、次回提案を行う予定です。

資料の最後に記載のとおり、答申項目は以下の二点です。

- ・佐用町立学校の適正規模、適正配置に関する基本的な方針について適正化に関する基本的な方針
- ・前号に掲げる適正化のための具体的な方策について

基本的な考え方としては、「町立学校の規模配置・適正化にあたっては、児童生徒数の動向等を踏まえ、適切な時期に適切な形態で実施する。」

この「適切な時期」「適切な形態」については、今後教育委員会や町が方向性を示すこととなります。

具体的な方策としては、「町立学校の規模配置の適正化等にあたっては、児童生徒数等の動向を踏まえ、先進事例を参考にしつつ、適正な時期や形態を検討するとともに、新しい学習環境の充実整備を図る。」

統合の形態は別として、地域との関係を踏まえた新しい学習環境の構築が必要です。さらに、「町立学校の規模・配置の適正化等にあたっては、アンケートや住民説明会での意見を検証すること。」

統合を進める場合でも、その形態や内容について丁寧に検証することが求められます。

以上の三点を柱として提案をまとめたいと考えています。小学校の学年制（6年・3年、または5年・4年）などの課題も含め、今後検討を続けます。ご意見があれば、教育委員会事務局までお寄せください。

7.閉会

【副委員長挨拶】

本日は多くのご意見を伺うことができ、私自身にとっても非常に有意義な時間となりました。先ほど委員長からお話がありましたとおり、次回は本日の意見を整理・集約したうえで、改めて提案内容が提示される予定です。その際には、委員会として、また事務局としてのお考えも伺えることを期待しております。

加えて、事務局におかれましては、膨大なアンケートや多様な意見をここまで整理・取りまとめていただいたことに、深く敬意を表します。大変な労力を要したものと推察いたします。改めて感謝申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。皆様、お疲れさまでした。